



全体会

基調講演

「地域の遺伝子を知る 観光・地域づくりがムラを興す！」

講

師

養父 信夫 (「九州のムラ」編集長)



基調講演

「地域の遺伝子を知る 観光・地域づくりがムラを興す！」

「九州のムラ」編集長
 ようふ のぶお
 養父 信夫

福岡県宗像郡大島村、玄海町（現宗像市）で幼少を過ごす。1986年、九州大学法学部法律学科卒。同年、㈱リクルート入社。1998年に独立し都市と農村をつなぐグリーンツーリズムを広げる活動を開始。同年、「悠々とした地域生活の総合誌」『九州のムラ』の発行に携わる。現在同誌編集長として、地域に生きる人々の暮らしを中心に取材を重ね、「九州のムラ」を通じ、ムラとマチを繋げる。また講演や地域づくりのアドバイザーなど、グリーンツーリズムやスローフード運動の啓蒙活動も積極的に行っている。2005年からは㈱マインドシェアに統合し、全国のムラ事業展開に向けて準備中。“ムラガール”の名付親。

皆さん、よろしくお祈いします。ご紹介いただきました、『九州のムラ』という雑誌をつくっています養父と言います。今回、こういう過疎問題シンポジウム基調講演に呼んでいただきまして、ほんとうにありがとうございます。

先ほどお話を伺いすると、優良事例表彰は24回目ということなのですが、ちょうど24年前、僕は東京のリクルートという会社に入って、まさしくバブルな時期を謳歌した時代でした。たぶんそのころから過疎問題というのが出てきたのではなかろうかなと思います。僕自身は10年間、東京で民間企業に勤めて、ちょうど阪神大震災がきっかけに、いろいろ思うところがあり、都市部と農村をつなげようということで、約16年前に飛び出た人間です。

今日は「地域の遺伝子を知る 観光・地域づくりがムラを興す！」というテーマです。

今日ご参加いただいている方は行政の方々が多かとお祈いしております。僕は今、ムラガールという20代、30代、40代の感性の高い、都会に住んでい

る女性たちを応援するための雑誌づくりをやっているんですが、皆さん行政の方々とそういう都会の若い人たちがコラボをすると、まだまだ日本の地域、農村、漁村、過疎地は戦えるんじゃないかなという、そんな具体的なお提言も後半でしたいと思いますので、よろしくお祈いいたします。

最初に自己紹介をさせていただきます。

僕の出身は福岡の宗像というところなんです。今は雑誌の編集長と、九州のムラたび応援団という、九州中のグリーン・ツーリズムの実践者の方々の任意団体の代表をやらせていただいています。この組織は1年に1回大きなシンポジウムをします。去年は長崎県さんと一緒にさせていただいて、大村を会場にして、約800人のグリーン・ツーリズムの実践者の方々が集まって、一生懸命勉強されました。今年は我が郷里、宗像で開催しますので、もしご興味のある方はパンフレットをお配りしたいと思います。

僕の父は、今はここ宗像の宗像大社という神社の名誉宮司をやらせていただいています。宗像大社の島は皆さん、ご存じですか。今、世界遺産に暫定登録までしました沖ノ島という神の島でも注目される神社です。この島には一般の方々はいらっしゃらなくて、神主さんが3週間交代でずっと守っている島です。どんなに台風が来ようと、冬寒かろうと、必ず神主さんは毎朝みそぎをしてお務め事、祭り事をやるという島です。僕の父もこういう活動、お務めをやっていました。

これは10月1日の写真です。宗像の神様は3人の女神様です。アマテラスオオミカミとスサノオノミコトの間にお生まれになった3人の女神様を、沖ノ島、それから、僕が小さいときに住んでいた人口800人弱ぐらいの大島村——今は宗像市になっていますが、それと宗像大社のある旧玄海町田島、その3社にそれぞれの女神様が鎮座されています。

その3人の女神様が一堂に集まる祭りが「みあれ



祭」という祭りです。これは曜日関係なく、毎年10月1日に行われます。このみあれ祭は神様の御霊を乗せた御座船の周りを約2、300隻が海上パレードする祭りなのですが、僕も小学校のときには、神湊というところへ神様を迎えに鼓笛隊を組んで参加していました。どうもそういう小さいときの祭りの経験、原体験があると、大きくなってもやはりその祭りには必ず参加するんですね。僕も、10月1日はまず真っ先にスケジュールはみあれ祭から入れます。

最近なかなか学校のほうも、こういう地元の祭りに小学生を参加させるというのが難しい時代がずっと長かったのですが、数年前から地元の小学校の子たちがまた鼓笛隊として参加していました。中学生の女の子は巫女さんの格好をして、この祭りに参加していました。こういう地域の祭りが何とかムラを盛り立てていくんじゃないかなということで、教育関係の方もいらっしゃれば、そこはぜひご支援いただきたいなと思います。

皆さん、来年10月1日、もし神湊の砂浜まで来られると、ちょうど10時、11時ぐらいにこの大海上パレードが見られるので、ぜひお越しください。

僕のテーマは、“ムラ(シマ)の生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラ(シマ)の生業に”ということです。僕は16年ぐらいムラを訪ね歩きながら、ひとつは雑誌の編集長として、ムラの魅力をとにかく外へ出していこうと。地元の人たちだとなかなか見えない魅力を、プロのカメラマン、ライター、僕の視点を持って、丹念に訪ね歩きながら発信する活動を15、6年ぐらいやっています。

それと、今は6次産業化が目立っていますが、どうしてもファンドになると大きな話になるんですが、小さな集落の6次産業をどう応援するか。それから、民間企業さんも地域にとっては決して敵ではな

いぞということで、福岡地所さんと一緒に企画して立ち上げた「九州のムラ市場」だったり、トヨタ自動車さんと企画した「Gazoo mura」だったり、いろいろな民間企業さんに、農村、漁村の活性化の応援団になってもらうような仕掛けもやってきました。

これは15年前に僕が撮った星野村の全国棚田百選の写真です。ただ、この15年後どうなったのかというと、この棚田もかなり荒れはじめました。15年間、農村、漁村を歩いていてほんとうに感じるの、やはりムラ人たちの力がかなり落ちてきています。それは、高齢化が進んでいるという事実です。僕を民泊で受け入れてくれた、その当時60代のおばちゃんたちも、今はもう75過ぎです。次の後継者はどうしようかという、そんな話がちらほらというか、かなり真実味を持って出始めているような状態まで今来ています。ただ、民泊をやっているおばちゃんたちはすごく元気です。こういうグリーン・ツーリズムは、九州はかなりメッカなんですけど、まだまだ元気でやっていらっしゃいます。

その中で、今、ぜひ皆さんと一緒に、行政さんも一緒にやりたいことのひとつのキーワードは、滞在交流型観光です。これは、“住んでよし、訪れてよし”という考え方で、地元の人たちが住んでいいと思わない限り、まちの人たちはやはり来ません。当たり前のことなんだけれども、そういうことを考える人たち、地域住民をどれだけこれからつくっていくのかと。

従来の観光というのは、施設中心、イベント中心、観光業中心の観光だったんですが、これからはぜひ滞在交流型の観光で、常時受け入れて、そのためには地域住民の人たちが何とかスイッチを入れて動いていただくことが重要になってきます。

“地域の資源(宝)を活かす、物語を紐解く、ここでしか(場所)、今しか(時)、この人と、誰でもではなく、あなただけ、地域のDNA(遺伝子)に基づいた組立て”がこの滞在交流型観光にとって大切な要素です。今、僕と一緒に観光地域づくりをやっている方は、阿蘇地域振興デザインセンターの元専務理事をやっていた坂元英俊さんという方で、彼は11年いたデザインセンターを卒業して、今、僕と一緒に観光地域づくりをやりながら、九州、全国を回っています。

これは、阿蘇神社の前にある中通商店街です。阿蘇というのは、九州の中でも一大観光地なんですね。年間1,800～1,900万人が訪れる地域です。ところが、商店街はどんどん過疎化し、シャッター街が増え、阿蘇



全域でも農家の人たちもどんどん離農していく、耕作放棄地が増えていきました。観光客はそれだけ来ているのに、これはおかしいぞと。阿蘇神社には確実にたくさん人は来られるんだけど、阿蘇神社の前のこの商店街は今までは待っているだけ、なかなかお客さんが流れてこないと。

商店街になぜ人が行くのかというと、魅力的な商品がないことには人は訪れないですよ。そんな当たり前の話を、坂元さんも地元の人たちとしていました。ただ、最初は「そげなこと言っても、なかなかそれは無理ばい」と。

その中で、「そうやな。ちょっとやってみようか」という、その当時30代の3人の若者がいたんです。1人は、花菱^{はなびし}という飲食店をやっていた人で、地元では昔から食べられた、ちょっとしっとりしたいなりをかなり大きなジャンボいなりとして一生懸命開発して、頑張ってきてきた若者です。それからもう1人は、たのシューという、かなり質の高いシュークリームをつくり上げました。もう1人は、馬ロッケという馬肉を使ったコロッケです。

この3人の若者たちが、とにかく一生懸命まず自分のやれること、明日からすぐやれることをやろうと。自分のお店の商品を全国に通じるためにいいものをつくらうという、ある意味当たり前のことをやりはじめたんです。

彼らが動き始めて地域が変わっていったんですね。3人それぞれつくったものが、これだったら世に出せるぞというタイミングを見計らって、坂元さんがメディアにどんどんつなげていったんですね。そうすると、メディアが取材に来ました。

1か所だったらなかなか取材にならないんですが、2、3か所あればいけるじゃないですか。それが放映されて、雑誌にも載って、お客さんから土日は

あいていますかという問い合わせが来るようになりました。今まで商店街は地元の人たちが中心で、あまり土日はあけていなかったんですね。こうなったら、マチの人たちが来るためには土日もあけるぞと。あけたけれども、どこにそのお店があるかわからない。じゃあ、自分たちで手づくりの看板をつくらうと。そうやっていくと、だんだん人が交流し始めました。

そうすると次に、彼らの親父さんたちが動き始めて、自分たちでユンボを持って行って、山から生木をそのまま持ってきて、夏でも涼しいような日陰もつくらうと、どんどん地域の中に植え始めました。

今は観光客は年間30万人です。シャッター街がほとんどなくなった、30万人の人が訪れる一大観光・交流、滞在型交流地域に変わっていったんですね。その間、補助金はほとんど使っていないとおっしゃっていました。

何が大事かということ、まずは地元の人たちがスイッチを入れるかどうか。

この過疎問題についても、ずっと行政がお金を出し続け、行政の担当者がいないと動かないでは、たぶん解決できないですよ。地元の人たちが、ある人たちがひとりでもふたりでもスイッチを入れられるかどうか。そのきっかけをつくるのは、もしかしたら行政の皆さんかもしれないし、我々みたいなメディアの人間、外からの風の人間かもしれない。きっかけはともかく、まずは地元の人たちにどうスイッチを入れてもらうかです。

うちの宗像は、宗像の三女神、女神を祭ってある神社ですが、今回は長崎県の話ですので、壱岐の月読神社さんをご存じですか。人知れず、このスピリチュアルブームの中で、ここはかなり意識の高い、スピリチュアルな感性の高い女性たちが行く神社になっています。

それで、僕は編集長の権限で、「女神の島々」というふうに勝手に特集を組んで、壱岐の月読神社と宗像の宗像大社の取材をしたんです。壱岐を僕が一番好きな理由は、ここは古い神社がほんとうに多いんです。年間250回以上神事が行われていて、その神事には必ず神主さんが神楽を奉納するんです。壱岐神楽——神職さんしか奉納していない神楽です。神楽と言えば今、九州の中では高千穂が有名なんですけれども、壱岐も実はすごいです。島の中の村々の神社の境内で年間250回ですよ。皆さん、ご存じですか、壱岐の神楽をご覧になった方いらっしゃいますか。1回見てください。すごくいいです。

それで、住吉神社の宮司に、「住吉神社の中で一番

大きな神楽はいつ舞われますか」と。「それは12月20日、大大神楽というのを住吉神社でやって、そこには氏子さんたちがかなり来ます」と。「ああ、そうですね。そのときにはいろいろ世話も必要なので、巫女さんを僕が集めるので、巫女さんをぜひ受け入れてくれませんか」という提案をさせていただきました。ちょうど衣装が4着ほどあるということだったので、全国公募したんですね。うちの雑誌に小さく載せたんです。そしたら、それが長崎県の「るーらる」というホームページにも載って、さらに巫女さん専用サイトみたいなものがあるらしく、そのサイトにも載って、この4人中3人は東京から来ました。飛行機代もフェリー代も全部自腹で、壱岐なんか行ったことのない子たちが、巫女さんをやりたくて申込みがきたんですね。

その子たちは12月20日、大大神楽での氏子さんのお世話をし、神楽もしっかり見学をし、翌日いろいろな神社をめぐり、一支国博物館も回って、彼女たちが勝手にブログ、フェイスブックで情報発信を始めました。



その夜、氏子さんたちを交えて直会なおらいがありました。その年の直会がすごく盛り上がりました。神社関係者と氏子さんたちとこの女の子たちと、それから観光関係の人たちが一緒に直会をやりながら、だんだん連携し始めたんですね。次の年は白沙八幡宮はくさ はちまんぐうさんで、その次の年は聖母宮しょうもぐうさんということで、だんだん神社さんが参画し始めました。

そうなる、巫女さんの人数自体はたいしたことないんです。ところが、年間250回以上、いろいろな村々で神楽神事が舞われて、壱岐の観光、お宿に泊まった方々にその情報が入れば、あとは二次交通、次のステップが展開できれば、壱岐の新しい魅力が発

信できるんですね。なので、誰でも彼でも来て下さいという観光ではなくて、あなただけに来て下さい。このケースの場合は、巫女さんをやりたい人だけ来て下さい。そういう際立った地域資源を活かした新しい観光のテーマが1個、2個、10個、20個、100個固まってくれば、必ず地域にはそういう際立った人たちが訪れる可能性は出てきます。

僕は、「ムラたび」というのを提案しています、人との心の交流がある旅。それから、ムラの物語に触れる旅。ムラの固有の風を感じる——風景、風土、風味、風習、風格、風情、地域にはそれぞれ固有の風が吹いているので、それをどれだけ磨くか。ただ、地元の人たちだけだとなかなか気づかないので、できればよそ者の視点も入れて、ぜひ磨いてやりましょうということだと思います。

これは外海町そとめ ちやうから見た立神岩の景色です。これは九十九島。これはたしか黒島教会ですね。ここは池島。ここはまだ本物の坑道が残っている島です。僕も入らせていただきました。軍艦島。これは野母崎でつくっている「からすみ」の生からすみ。地元の人たちはそれを刺身の上に乗っけて、それで食べるんです。すごい絶品でした。こういう地域の食も含めて、資源が地元にはまだまだたくさん眠っているということです。

「ムラたび」とは、交流していく中でムラの暮らしに触れていく旅です。今、マチの人たちは本物の暮らしに触れたいんです。島の暮らし、ムラの暮らし、偽りのあるつくられた体験ではなくて、その地元が従来からずっとやっているムラの暮らしを、マチの人たちは今、少しお裾分けさせて体験させてくださいということだと思います。

交流を進めていくと、その中で必ず移住、定住につながるケースも出てきます。

これは僕が『九州のムラ』をつくって、約10年前ですかね、「ムラの生業」という特集を組んだときに取材した宮崎県のある炭焼き職人の小田さんという方です。炭を焼いて60年みたいな、炭焼きの達人でした。ただ、この達人の息子さんたちはマチへ出て、なかなか後は継いでくれずに、もうマチに出たきり。

小田さん、やはり家によそ者が入るのは嫌だと。ただ、この炭窯については、よそ者が入っても別にいいよという、そんな話を僕にしてくれました。そのときは別に後継者を募集することもなく、ただ「ムラの生業」という特集の中で紹介したんですね。そうして約3か月ぐらいたったときに、うちの出版室に1枚の読者はがきが届きました。『九州のムラ』の10号の「ム

ラの生業」の炭焼き職人の小田さんのところに僕は今、修行に入っていますという、20代後半か30代前半の男性でした。

その後、4年前に「ムラで暮らす」という、ムラ暮らしのすすめという特集を組むときに、その話を僕は思い出して、小田さんのところに電話したんです。あのときの若者はもうおらんでしょねと。まだいるとは思っていませんでした。そしたら、小田さんが、「いや、子供までおるばい」と。実は結婚して、子供ができていたんですね。すぐ取材に行きました。そしたら、彼をきっかけに、10数人、炭焼き職人がよそから入ってきていたんですよ。

彼は、W O O F (ウーフ) といって、有機農業をやっている人たちが自分のところに泊めて、労働を提供してもらかわりに食事と寝床を提供するという、そういうところにも登録していることもあって、ネット上で彼の活動を知って、若者たちが全国から泊まりに来ていたんです。彼の炭焼きの姿を見て、感化されたのか、それから10数人の若者たちが住みついたと。

地元の人たちに言わせると、いろいろなことをおっしゃっていました。「最近の若い連中は意外と粘るぞ。最初は1か月ぐらいで尻尾を巻いて帰るかなと思ったら、最近の若い者は。まんざら捨てたものじゃなか」と、こういうことが最初に言われた話ですね。「ただ、あいつらはまだほんとうの炭焼きの怖さを知らん」と。炭焼きは、金属疲労じゃないけれども、炭窯がある日突然がらがらと崩れちゃうんですね。崩れた瞬間に現金収入はゼロになります。なので、地元の炭焼きのおじちゃんたちは、一窯だけじゃなくて、二窯、三窯、しかも農業もやりながら、現金収入の道を幾つか持って実はやっているんです。地元には中学校までしかないの、子供たちが高校に上がる時には、現金をちゃんと持って、仕送りせないかんと。だから、そこが次のステップやと言いつつも、こういう若い連中をしっかりとサポートしているんですね。

ただ、この炭焼きの場合は、マーケットはもうあるんです。宇納間備長炭というかなりブランドが立っている炭焼き集落で、マーケットにはつながっていますが、ただ後継ぎがないんですよ。そこによそからIターンで若者たちが入ってきた事例じゃないかなと思います。

今、僕は九州のグリーン・ツーリズムの全体のコーディネーター組織もつくっているんですが、今、一番必要なのは、集落集落ごとにこういうマチとム

ラをつなげる、行政さんと民間をつなげる、メディアをつなげる、地域住民もつなげる、そういう小さな単位のコーディネーター組織が必要だと思っています。

例えば民泊をやっているおばちゃんたち、生きがいづくりであれ、何であれ、一生懸命やっています。ただ、結構ムラの人たちは忙しいですよ、島の人たちも。なかなか専任でお世話をする組織がないんです。今までこれは行政さんが担っていました。行政さんは、熱血行政マンがいるときは動くんです。それから、補助金、交付金があるときは動くんです。ところが、熱血行政マンがいなくなり、補助金がなくなったときに自然消滅していくと、こういうことをずっと繰り返しているんですね。

そんな中で、さて、どうやってこの地元のコーディネーター組織、専任の人材を立ち上げていくのかという、その話を今度はやりたいと思います。

小値賀の話は、後でアレックス・カーさんがしっかりされると思うんですが、まさしく小値賀のおぢかアイランドツーリズム協会のような組織だと思ってください。

僕が今、提案しているのは、これから行政さん、企業誘致も確かに大事です。でも、企業誘致は全国の自治体さんが狙っていますよね。民間さんも、リーマン・ショック以降はなかなか厳しい。アベノミクスの中でそこがもう一回復活するかどうかはこれからの動きだと思うんですが、企業誘致よりも、今は起業家誘致の時代じゃないかなと思います。特に全国の過疎になっている離島、農村、漁村については、大きな企業を誘致するよりは、起業家マインドを持った人をひとりでもいいからまずは入れましょうよと。

その人たちが入ることによって、例えば規格外の農産物をどうやってマチの人たちに売っていくかと

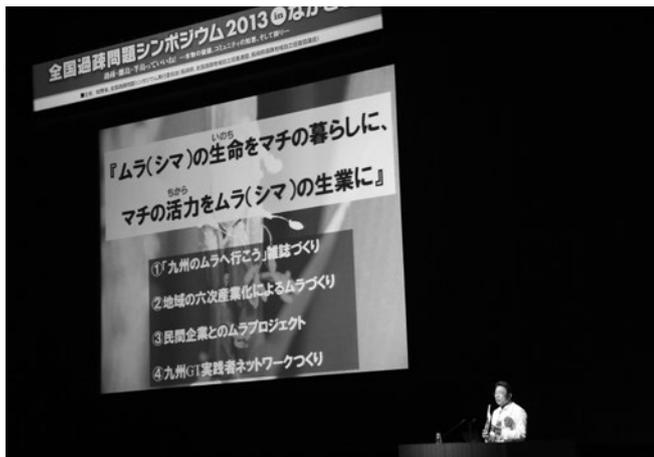
よそ者の力を活用する。

島には、観光資源(ブルールーリズム、エコツーリズム)や食資源が眠っている。それを再発見し、磨いて、都市部につなげていくには、都市部の視点を持ったよそ者の力を。かれらの情報発信力、企画力、デザイン力、営業力などを組み入れて、新たな生業づくりを目指す。

ただし、最初の導入期間(2、3年)は国の制度も利用する・・・

- ① 総務省 地域おこし協力隊
- ② 農林水産省 田舎で働き隊！(食と地域の交流促進対策交付金)
- ③ 厚生労働省 ふるさと雇用、緊急雇用 など

か、例えば廃校になった学校をどう活用するか、いわゆる、あるもの探しだけではなくて、あるものというのはプラスだけではなくて、マイナスもありますから、マイナスも含めて、地元の人たちと一緒にどうやって経済をつくっていくかというような、そういう起業家マインドを持った人たちをひとりでもいいからまずは入れていきましょうということです。



彼らは、こういう地域活性という仕事を専任でやった人間というのはそんなにいないんです。でも、都会には住んでいたんですね。これから農村、漁村が戦っていくためには、“ムラ(シマ)の生命をマチの暮らしに、マチの活力をムラ(シマ)の生業に”、マチの経済という力を農村、漁村に入れられないことには、なかなか戦っていけません。そのときに、交流であれ、ツーリズムであれ、観光、物の販売であれ、ターゲットは都市部の人たちです。ということは、都市部の人たちの視点を持った人を地元の皆さんのところに抱えて、仲間にしていかないと、彼らがどういうことを考えているかというのはなかなか見えてこないですね。

都会に住んでいたというだけで、例えば情報発信力、例えばフェイスブックをやる、ツイッターをやる、ブログをやる、都会の人たちは当たり前のようにやっていらっしゃいます。それから、パワーポイントで企画書をつくっていくとか、営業するとか、都会に住んで仕事をしている中で、暮らしている中で自然にそういうことを身につけているんですね。そういう力を持った人たちをどんどんムラの中に入れていきましょうという提案です。

今日、総務省さんの発言もあったように、このきっかけになる事業は、今、お国のほうがいろいろ出されています。僕は「地域おこし協力隊」の人たちのアド

バイザーとして、奄美大島、昨年は対馬、今年も少し壱岐のほうにかかわらせていただきました。

どうですか。地域おこし協力隊を導入されている自治体さんは今、会場の中でどれくらいいらっしゃいますか。はい、じゃあ、そのまま挙げておいてくださいね。じゃあ、それを検討しているところはどうですか。まだあまり挙がらないですね。おろしていただいて結構です。

今日、僕はぜひこれを皆さんにご提案したいと思います。農水省さんも「田舎で働き隊！」とか、厚生労働省さんも「ふるさと雇用」とか「緊急雇用」とかがありますが、こういう外部の人材をどうやってムラの活性化につなげていくか。

ひとつ最初の事例は、宮崎県の高千穂町というところです。秋元集落、総戸数43戸、農家戸数33戸、いわゆる限界集落と言われているところです。秋元集落、こういうところですね。今でもおばちゃんたちの自給自足的なこんな農業を当たり前のように見られる、そういう村です。

中心リーダーは飯干淳志という男性なんですが、彼は元行政マンです。行政を定年前にやめて、高千穂ムラたび活性化協議会という組織をつくって、今、株式会社の社長までやっています。まだ若いですよ。

ここでは今でも神楽を家で舞います。高千穂といえば、観光神楽が高千穂神社のところで、500円払えば、3番、4番は見せてくれるんですが、ここは毎年11月26日、順番で夜神楽を舞うような集落です。飯干さんも“ほししゃどん(奉仕者) ”、舞い手として、地域をずっと応援してきた行政マンです。

きっかけは、平成21年3月に、都会から12名の若い子を僕が集めてきて、それで、この秋元集落の活性化に、「淳志さん、何か一緒に考えてやりましょうや」というのがひとつのきっかけでした。3月だったので、6泊7日で参加したのはほとんど学生さんたちでした。東京の優秀な建築を学んでいる、経済を学んでいる、文学部、なぜか女性の方が多かったんですが、そういう子たちが入ってきて、真剣に侃侃諤諤、いろいろ議論するんですね。

彼らが提案してきたのは、秋元集落のワンデー八百屋を、高千穂の商店街の空き店舗を使って1日だけやりたいと。単なる農産物を売るだけの提案ではなくて、この秋元集落の暮らしぶり自体が実はスローライフで、これからの都会の人たちにすごく大事なヒントがたくさん詰まっている、なのでその価値観もあわせて情報発信できるスペースを創りたいという提案です。単なる物を売るというよりも、ワー

クシヨップをやって、ムラのおばちゃんたちに取材をして、ばあちゃんたちの食の技とか、そんなことを丁寧に取り集めながら、6泊7日やっていたんですね。

最初、ムラのおばちゃんたちは面食らっていました。「何かいきなり野菜を売らせてくれと来たけど、野菜のことも農業のことも何も知らん子たちで大丈夫かなと思った」と。ところが、後で聞くと、正直うれしかったと言うんですね。家を出て帰るまで誰ともしゃべらないで一日終わるんですね。わざわざ田んぼ、畑まで来て、こういう子たちが一生懸命何か語りかけて、それがうれしかったんですね。

このたかだか一日だけのイベントなので、売れた金額は10万程度だったかもしれません。最後、売れ残った野菜なんかは行商して、この子たちが売って歩いていました。ただ、これで何が起こったかというところ、この写真が一番象徴的なんです。おばあちゃんたちに火がついたんです。

このばあちゃんたちからすると、この子たちは孫世代です。息子、娘世代から言われても、あまり動かないんですけれども、孫世代は何でもオーケーなんです。特に、ムラガールと僕は名づけましたけれども、こういう都会のいい感覚を持っている女性たち、この子たちがほんとうにムラのばあちゃんたちに火をつけたんです。何とそれがきっかけになって、このばあちゃんたちはほんとうに無人直売所をおらが村のために立ち上げたんです。

こんな集落の直売所が果たしてどれだけ売れるのかという。どうですか、皆さん。生シイタケ、こんなにぷりぷりしたどんこがこんなにたくさん入って100円ですよ。僕は、これは安すぎるので、せいぜい300円に値上げしてくれと再三提案しました。そのたびごとに却下されました、「いや、よか」と。「何ですか」



と。この奥に秋元神社という氏神様があるんです。この氏神様が、スピリチュアルブームの影響で参拝者がかなり多くなって、その帰りに寄られる無人直売所なんですね。「我が氏神様にわざわざ来ていただいて、それだけでうれしかです。その感謝のお返しです」ということで、今でも値上げしてくれません。

おばあちゃんたちが立ち上がったら、壮年世代が立ち上がらざるを得ないんですね。それで、率先して、元行政マンの飯干淳志は役場をやめました。最初、「養父さんとも一緒に連携したいので、高千穂ムラたび活性化協議会という名前にしたけど、いいかな」と。それで、地元の人たちと一緒にこういう加工施設をつくったりしました。まだ全員が全員賛同しているわけじゃないと。そんなことやって無理やろうという視線の中で、やれる人がまずは体を動かしていくと。みずからも今、民泊もやり始めました。これは飯干さんのご自宅兼民泊です。

どうですか、これ。さっきの43戸の集落の神社が数年前に改修されて立派になりました。今、僕が15年ずっとムラとか島を回りますと、地域の小さな神社がどんどん今、廃れているんですね。なかなか改修できない。氏子さんたちの力が今は落ちています。そういう中でこの秋元集落は、自分たちの力で神社をきちんと復活できるぐらいの力を持っているんですね。

集落のホームページも立ち上げました。これは初年度にかかわった立命館大学の女の子が翌年、緊急雇用で1年入ってきて、それで立ち上げたホームページです。今は株式会社化して、常時若者たちを雇用しています。僕が行ったときは3人でした。この若者たちが村のばあちゃんたちにどんどん元気を与えているんですね。

ここが今やっているのは、どぶろくの特産をとって、どぶろくを売ったり、お茶をつくったり、最近はいよいよまちなかにカフェ、レストランまで立ち上げて出してきました。そういうことです。

この地域おこし協力隊は、先ほどお伺いしたら、長崎県は今、予定も含めると30人以上ですかね。30を超えて、地域おこし協力隊が入っている全国でも有数の県ということです。この地域おこし協力隊、今日は行政の方がたくさんいらっしゃるの、ぜひ皆さん、ご検討をしてみてください。

僕は奄美大島だったり、いろいろな島の活性化として、この地域おこし協力隊を行政の首長さんにお願ひして、入っていただいてということで、島おこしに頑張っているんですが、その中に幾つ

かポイントがあります。

地域おこし協力隊は、普通はムラのおじちゃん、おばちゃんたちの見守り隊とか、いろいろな出ごとがたくさんあるので、そこをちょっと手伝ってねとか、そういうかたちで、地域全体をだーっと面倒見てもらうために入れていくんですね。最初はそうでした。

ところが、3年間は特交税の中で活動資金が上限200万の中で動いていくんですが、そればかりやっていたら、3年が終了しお金がなくなった瞬間に地域で生きていけないんですね。これは当たり前ですよ。地域で生きていけない。3年は長いようで短いんです。

それで、今、僕が地元の人たち、行政の人たちと一緒にやっているのは、最初から重点地域を決めましょうと。そのときには、行政の観光部局、水産部局、企画部局、教育機関部局、いろいろな部局の人たちに集まっていただいて、作戦会議をまずやらせていただきます。その中で、あそこの地域は元気があるぞとか、あそこは地域リーダーがおるぞとか、あそこは都会の人たちにとってはすごく魅力的な地域になると思うとか、行政さんとまずそういう作戦会議をして、地域おこし協力隊がかかわれる可能性のある地域を決めるんですね。

行政の難しいところは、かならず平等にという考えが最初に立ってくるんですが、そうではなくてモデル地域を決めるということです。まずそのモデルがうまくいけば、次のモデルとして第2、第3のところがつながっていくというふうに発想をちょっと変えていただいて、できれば2、3か所の重点エリアを決めて、その中でどう展開するかと。

皆さん、壱岐の海女さんの取材、記事をよくご覧になった方がいらっしゃると思うんですが、僕は、白川市長——今は全国離島振興協議会の会長さんとお話したときに、対馬が頑張っているように、離島の活性化をぜひ地域おこし協力隊をモデルに壱岐でもやりましょうと。その中で僕は、ぜひ海女さんを1人入りたいと提案させていただきました。これはNHKの「あまちゃん」が放映される前の話で、僕は知らなかったんです。

あそこは八幡集落に50何人の海女さんがいるんですね。ところが今、いそ焼けでだいぶん海も枯渇して、アワビ、ウニがとれないんです。昔は300万円、多い人は400万円、1シーズンで上げていたのが、今は100万円前後、多くて150万円です。そうすると後継者がいないんですね。なので、このままいくと八幡集落の伝統的な海女漁が消えてなくなる、これは地域の

DNAがひとつ消えていくぞということで、首長とお話をして、できれば八幡集落に海女さんを1人入りたいと。入れる拠点は地域の漁協に入りたいという提案をしました。

海女さんは、5月から9月までが漁期なんですね。10月からは潜らないんです。ここが八幡です。小さく見えている黄色いこれがおけです。これは、おばちゃんたち、海女ちゃんたちが潜っているところです。このおけもなかなかカラフルで、すごくいいんです。このばあちゃんたち、潜る前には必ずはらほげ地蔵にお祈りをして、それから漁に入っていくんです。



彼女が今、海女ちゃんとして入ってきた^{あいくち}合口さんといって、何と陸前高田市の漁師の娘でした。不思議なご縁がありました。昔からとにかく海女さんになりたくて、大震災が起こったときに、たまたま長崎市さんが入れている地域おこし協力隊の隊員のところが親戚だったので、身を寄せて、長崎にずっとそのままなんです。対馬の移住定住のモニターツアーを僕がやったときに、もうひとり、琴海町に入っている平井杏奈さんという地域おこし協力隊員が友達だったんです。今度、地域おこし協力隊は海女さんを募集したいんだと言ったら、私の友達で海女さんをやりた人がいると言って、彼女をつなげてくれて、5月からすぐ入ってきたということです。

彼女は、海女漁もやって、漁協の中の直売所の立ち上げスタッフもして、そして3年間やれば、何とか地域おこし協力隊の活動支援金の200万円も維持しながら、たぶんそのまま移住、定住できていくんですね。こういうことを今、行政と一緒に、最初の作戦会議の中で地元の人たちと一緒にやりつつあります。

さっきの中核拠点をどう決めていくかと。重点地域を決めた後に、その地域の中の6次産業化につな

がるように。中核拠点はいろいろあります。観光協会、公社、第三セクター、農事生産法人、道の駅、直売所、農家レストラン、漁協、農協などなど。今、地域おこし協力隊が、壱岐の場合は4人入っていて、2人は観光連盟に入っています。1人は八幡集落の東部漁協、1人は農事生産法人の原の辻という、雑穀とか古代米とかをブランド化するためのブランド化マネージャーとして、地域おこし協力隊として入ってきています。



あと、山口県山口市に入っている隊員の中で、ちょっとおもしろい経歴の子がいます。その女の子は、元てもみんの社員です。だからマッサージという手に職を持っているんです。彼女とコンビを組んでいる男性は、まちの中で便利屋を仕事としていた男性です。この二人がセットで徳地という集落に地域おこし協力隊として入っているんですね。彼らのミッションは、健康食をテーマに、どうやって地域の何とか茶をブランド化するかという、これはこれで地域おこし協力隊のミッションとしてやっています。

彼らは隊員の任期の3年たっても十分食べられると思います。3年の間に、ムラのじいちゃん、ばあちゃんたちとすごく仲よくなって、3年間はサービスでマッサージをしながら、これが3年たったらそのまま顧客になっていくと思っています。その女の子がマッサージしている間に、いろいろなよま話になって、いろいろな困り事が出てきたときに今度が“ムラの便利屋”としてもう一人の男性の隊員が出動するということです。こういう手に職を持った人がそのまま地域で移住、定住するというケースはあるんですが、できれば、地域の6次産業化につながりやすい組織の中に最初から入ってもらって、どう展開していくのかということが大事になります。

その中で、地元の人たちと最初から、3年後、5年後、10年後、自分たちの地域はどうありたいのかという、こういう集落ビジョンをまずつくることが大事なんですね。ここは行政さんの仕事ですよ。行政さんも一緒になってやらなくちゃいけない。地域の課題は一体何だろうか、それから、地元で一番大切にしたいものは何なのか、一体何を残したいのか。ほかの地域にはなくて、あなたの地域にしかない歴史とか、そういうものは一体何なのでしょうねという、これが地域のDNAということです。

地域で取り組む内容は一体何でしょうか、それは誰が中核になって、どこを中核拠点にして、誰がリーダーで、3年後にどこまで持っていったらいいだろうかと、そんな議論をずっと、ワークショップをやりながらやっていくと、その中で初めて、ああ、それをやるためには、ここの機能をやる人がおらんばいと、ここがどうしてもちょっと手薄になるばいと、そういうのが見えてくるんですね。その見えたとこにピンポイントで地域おこし協力隊を募集していくと。こういうやり方がすごく大事です。

それと、地域おこし協力隊は一人だとめげるので、できれば複数入れてください。複数入れた中に、できればひとりぐらいいは地元からの推薦者を入れるんです。今は東京へ出て仕事をしているけれども、地域に仕事があったら帰ってきたいと思っているあいつがおるんやと、じゃあ、ちょっとあいつに声をかけて、これを機にちょっと話してみようかとか。地元からの推薦枠もぜひ入れてください。

そして最後の面接は地元でやる、これが大事です。ある日突然、行政の名刺を持った地域おこし協力隊なる何か不思議な落下傘部隊がいきなり地域に来た、じゃなくて、自分たちはこんなことをやりたいが、あんたの考えを聞かせてと。あんたやったらわしらもいいよ、一緒にやろうという、ここからスタートすると、すーっと1年目から動いていくんですね。

去年、僕は対馬の地域おこし協力隊にずっとアドバイザーで入っていたんですが、ここは初年度、第1期生が5人います。皆さん、新聞なんかでも活動はご存じかもしれませんが、一番右の山下君は、年間1万頭出てくるイノシシの皮を使ったレザークラフトをどうやるかという、そんなミッションで入ってきました。また、鳥デザイナーは、6次産業化の担当として地域に入っています。それから、生物多様性保全担当の木村さんの話は後でゆっくりしたいと思います。

彼女たちが入って、こういうデザインなんかも起

こしていくんですね。よそ者が持っているデザインという力を使って、地元の人たちと話をしながらどうやっていくのかと。

木村さんは、なかなか頑張っています。彼女は東北大学のドクターを出ていて、アイナメの研究をして、絶滅危惧種の生物と人間がどう共生して生きていくのかみたいな、そんな研究をずっと大学時代にやっていたんです。その研究だけではなくて、じゃあ、それがほんとうに社会に実践できるのかどうか自分の力で試したいと。そのときに地域おこし協力隊——対馬の場合は島おこし協働隊という名前ですが、公募の話を知って、それで対馬といえば絶滅危惧種のツシマヤマネコがいる、じゃあ、ツシマヤマネコと人間が共生していける社会はほんとうに無理なのだろうかというのを実証実験、自分がかかわることによってやりたいということで入ってきた才女です。細い子なんですけれども、木村さん、なかなかこのポスターはさまになっています。左が原田区長さんです。



最初、区長さんは「帰れ。あんたが来るようなところやない。うちの集落は、若い連中が明日もないと言ってどんどんよそに出ていくのに、あんたみたいな優秀な子が来るようなところやない、悪いこと言わんけん帰れ」というのが最初のセッションだったらしいんですね。

ただ、彼女からすると、ここの土地が一番理想なんです。この耕作放棄地。ヤマネコのすみか。ヤマネコといいながら田んぼ猫で、野ネズミ、カエル、ミミズ、そういうのを食べて生きているのがヤマネコなので、山に竹があって、水が流れて、ここが理想的と。確かにヤマネコの目撃情報も一番多いです。志が多きたまるという志多留という集落、ここじゃないとだ

めなんですとって、かなり強い意志を持って入ってきたんですね。

彼女は、有言実行、それからフェイスブック、ツイッターもかなりやります。総務省さんの事業も一緒になって、島おこし実践塾というのを去年やったんです。夏休みのある短い期間に、彼女が、私はこういう考え方で、こういう地域に入って、こんなことをやっています、ぜひ皆さん、応援してけれませんかフェイスブックで呼びかけて、何と30人が全国から集まっています。その若者たちが耕作放棄地を3時間ぐらいでムラの人たちと一緒に、あれよあれよという間に復活していくんですね。

彼女はここでお米をつくっています。つくったお米は、島デザイナーの松野さんがヤマネコ米としてたぶんブランド化していく。たぶんそれを真っ先に買ってくれるのは、この田んぼを耕してくれた、全国に散らばる若者たちだと思います。

それから、古民家もマチとムラの交流拠点として活用しはじめています。最初、テンが糞をして、床なんかも朽ち果てていたんですが、それを全部剥がして、中の掃除を全部やりました。これも2時間ぐらいですよ。やはり30人ぐらいだと違いますね。

そんなこんなやっていると、民間企業がぜひ我が社の古民家再生のプロジェクトも一緒にやりませんかとか、いろいろな話が舞い込んできています。

対馬の地域おこし協力隊の木村さんと、さっきのデザイナーの松野さん、この二人がMIT——みつける・いかす・つなぐ——という中間支援組織を立ち上げました。立ち上げた途端、今度は行政さんとしては、移住、定住の事業や、グリーン・ツーリズムの事業をやってくれないかという話にもつながってきます。実際、彼女たちはグリーン・ツーリズムの事務局としてもやりたいというふうに動いています。

木村さんの収入の道は、これ一本だとやはり無理なので、農家としては大体何十万かなとか、講演とか執筆活動も何度かやっているとか、そのMITの事業運営で事務局経費としてこれぐらいとか、そういうのを積み上げていくと、来年の3月末がいちおう3年の終わりですけれども、何とかそこから先も生きていけるぞと。最初は反対していた原田区長も、彼女がいないと困るので、何とか木村隊員にいい旦那を見つけないかと。今、村抱えで旦那探しを一生懸命やっています。こうやって変わっていくんですね。

12月4日、5日、九州のグリーン・ツーリズムのシンポジウムを宗像でやります。去年は長崎県でやりました。グリーン・ツーリズムと、こういうよそ者



たちがどうかかわったら何が動いていくのだろうかというのが今年のテーマです。

九州はグリーン・ツーリズムのメッカと呼ばれている地域なんですけど、去年、長崎県でやったテーマは、ムラの6次産業化というのがテーマでした。その前の鹿児島県でやったのは、民泊型教育旅行、まさしく九州で言えば松浦、それから大分県全域、そこに台頭するべく新幹線全線開通の後押しで、鹿児島県が民泊型修学旅行をだーっと伸ばしていったんですね。3年前はそういうテーマでやりました。

今年は、民泊型修学旅行だけではやはりムラは生きていけないぞ、地域の6次産業化はどう進めるのか、そのためにはそういうよそ者の人材も要るよねということで、九州のグリーン・ツーリズム掛ける若い人たち——僕で言うとムラガールという人たちがかわれば、掛け合わせれば何が起こっていくのだろうということで、対馬のMITの木村さんにも来てもらって、彼女たちの活動を発表してもらったり、あと、ある芸術系の大学の女の子たちが農村をデザインで活性化したいということで動いている事例とか、今回は若者たちを中心にシンポジウムをやるのかなと思っています。

たしか受付のところでもこのパンフレットを配っています。九州中のうまいものが大集合しますので、ぜひ皆さん、集まってください。九州グリーン・ツーリズムシンポジウム2013in福岡です。宗像大社もご案内したいと思っています。

最後に、この過疎問題はなかなか難しいです。正直、これから生き残っていく地域と、どんどん自然消滅していく地域とが出てきます。その一番のはざまになっていくのは、地元の人たちがスイッチを入れるかどうかなんです。もうだめやと思った瞬間に

終わります。

僕がこの前、あるムラに呼ばれたときに、区長さんはもうだめだと思っていらっしやいました。もう14軒しかないんです。その区長さんの最初に出てきた話は行政への陳情でした。何とか先生がいらっしやった時代はよかったと昔の話をずっとされて、そのときには補助金がたくさん来た。そうじゃないんですね。

その中に一言も発言されなかったけれども、50代のおばちゃんがありました。そのおばちゃんは、みそをつくって1,500万円、売り上げを上げているんです。まだ拡充できるんです。ただ、ご重鎮の奥さんたちにまだふたをされていて、なかなか動けないんですね。でも、もう今、動かないと間に合わないんです。その動くきっかけが要るんです。

その動くきっかけのひとつとして、今日、僕が提示させていただいたのは、短期でもいいので、まさしくこういうムラガール的な、できれば総務省の地域おこし協力隊みたいに3年間その地域に入って行って、ムラのじいちゃん、ばあちゃんたちに火をつけて、あとは行政さんが連携していくという仕組みを作っていきたいということです。

総務省の場合は、企画サイドの動きです。この過疎問題というのは、農水部局、観光部局、企画部局、いろいろな部局が絡んでくるんですね。今、海女ちゃんが入っている東部漁協がある集落は、農水省の共生・対流の一括交付金の事業も漁協さんに手を挙げていただいて、入っています。総務省のアドバイザー事業も入っています。そこにはたぶん、長崎県さんの「『がんばらんば長崎』地域づくり支援事業」も絡んでくると思います。そういう県、それから国、しかもいろいろな省庁の事業も絡め合わせながら、でもやるのは地元の人たちなので、その地元の人たちに火をつける役はもしかしたら行政の皆さんのちょっとした動きじゃないかなと思います。

ちょうど時間になりましたので、僕の話はこれで終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。